

とジャキジャキした舌ざわりが良い。アントシアニン色素はタンパク質の存在では色調が変化してしまうため、魚や肉加工品にはほとんど加えられていないが、タンパク質と共存状態で変色防止ができれば利用が増大してくることは間違いない。しかし変色を防止する有効な添加物が現在は開発されていない。

最後に一言、近年発ガン性などの問題で消費者は合成着色料に対する不信感が増大し、

益々忌避されてきているように食品添加物としての着色料は以前から化学合成品に頼りすぎてきた。そのため安全性に疑問がもたれて、取り消されたものもある。そこで天然物に由来する色素の製品化が盛んにみられるようになってきたが、天然物なら安全という過信をおこさせている一面もある。

従って、今後より綿密な科学的安全性の検討を繰り返すべきであろうと考える。

いもはいもか？

千葉県香取農業改良普及所
多古支部

北崎 順一

1 はじめに

千葉県香取郡は、新東京国際空港のある成田市の東側にあり、関東ローム層からなる北総台地の北東部に位置し、台地では古くからサツマイモが作られてきた。現在、全国でも有数の食用かんしょの一大産地となっているが、毎年、5月、6月のサツマイモのマルチが織りなす畑一面の幾何学模様は、特異的な感じさえる。(写真①)

2 サツマイモ栽培の過去・現在

畑地帯の主要作物は、落花生・麦・デンブンかんしょであったが、昭和30年代～40年代前半にかけて、高収益な換金作物として食用かんしょが取り入れられた。高系14号や埼玉県川越地方より金時（紅赤）の種いもを導入し、機械化にともなって、食用かんしょの栽培が徐々に増加した。

40年代にはコーンスターチ輸入によるデンブンかんしょの急激な衰退とともに食用かん



しょが栽培の中心となり、皮色・肉色・形状・味・揃いなど、野菜としての商品性が重要視されるようになった。50年代に入ると、食用かんしょは価格が比較的安定していることや、貯蔵出荷ができるため労力分散がうまくいくことなどから台地畑作農家の基幹作物となった。

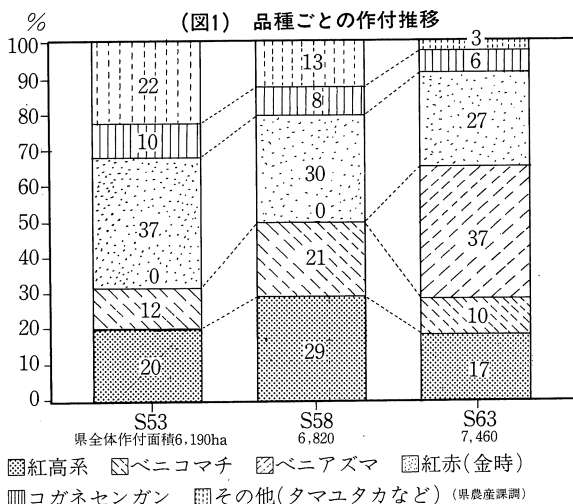
マルチ栽培により収量・品質が安定し、耕耘・マルチ張り・収穫・いも洗いなどの機械化とともにかんしょの連作・単品生産となってきた。一方、40年代後半以降、収益性の低

さ、作業性の悪さなどから、輪作作物であった麦、落花生が敬遠され、栽培面積が減少した。マルチ栽培は、早堀りだけで無く、普通堀りにも取り入れられ、畑一面がマルチによるかんしょ生産になり、経営面積の50～60%以上がかんしょ面積で占めるに至って、連作障害的な問題が表面化してきた。

今では、トラクターによるマルチ同時消毒機やつる刈り機の普及と共に、借地により規模拡大をはかっている農家も数多い。しかし、規模拡大は、労力等に左右され、即、所得向上につながらず、反面、品質の低下を招きやすい。その対策として、かんしょの栽培面積を極力抑え、かんしょ一辺倒の経営で無く、麦などの輪作作物を復活させ、量で無く、品質を重視した経営への転換をめざす動きも出てきている。

3 品種の変遷

千葉県における栽培品種の推移は図1のとおりである。また、香取郡市における63年度系統出荷の品種割合は表1のとおりとなって



いる。ペニコマチは、昭和48年に導入され、昭和50年、奨励品種として採用されるとともに栽培面積も増加してきたが、ペニアズマの登場とともに、一部地域を除いて片隅においやられつつある。

ペニアズマは、立枯病の抵抗性品種として58年試験導入され、59年に奨励品種として登録された。年々、栽培面積が増加し、今年の作付割合は50～60%を越す勢いである。これは、皮色・味が良く、市場側からの出荷要望が高いのはもちろん、生産者側からすれば、品種として最も新しいこともあり、収量が高く、上位等級割合が高いなど作り易く、かつ、早堀り、貯蔵用に向き、経営的に有利なためである。

金時(紅赤)は、もともと、大正赤などという名で、食用として戦前から作られていたが、現在の金時は、昭和30年～40年前半にかけて、埼玉県川越地方より種いもを導入したのがはじまりである。食用かんしょの中で、上位等級は最も価格が高く、サツマイモの王様と言われる所似であるが、収量が低い、上位等級比率が低いなど欠点もある。何しろ、出荷階級が20数種類もあり、品質・価格もピンからキリまで発生する。上位等級比率の高い、良いイモのできる農家や、販売方法の上手な販売力の強い組合には好都合だが、逆の農家や組合にとっては作付を維持するのが難しい品種である。

連作のほうが、良いイモができるなど長所もあるが、耐肥性に乏しく、つるばけし易いため窒素成分をしぼった畑でなければ作れないなど、良いイモのできる条件が限られてしまうため、次第次第に

(表1) 香取都市食用かんしょ品種別共販出荷実績 (S63/4～H元/3月)

農協別	品種 ベニアズマ	金 時	千葉紅	紅小町	その他	計
	%	%	%	%	%	%
香取西部	1,204,702	714,936	272,733	74,722	113,264	2,380,367
佐 原 市	368,148	139,302	27,896	22,667	7,364	565,377
小見川町	25,839	15,154	1,714	4,036	25,784	72,527
山 田 町	40,352	23,433	397	358	506	65,046
干 潟 町	24,672	—	266	—	95	25,033
東 庄 町	9,423	—	135	—	—	9,558
栗 源 町	243,131	157,176	18,735	254,068	2,975	676,085
多 古 町	330,616	225,711	80,134	45,844	19,348	701,653
計	2,246,883	1,275,712	402,010	401,705	169,336	4,495,646
%	50.0	28.4	8.9	8.9	3.8	100

(香取西部農協：大柴町、下総町、神崎町) (県経済連調) (% = 5 kg)

作付面積が減少しているのが現状である。

4 いもは野菜である、作物では無い

市場販売用のサツマイモが作付のほとんどを占めている現在、消費者(市場側)より生産者に求められるのは、第一に見ばえの良さである。皮色、形状の良さが最も前面に押し出される。その次に、味・肉色の良さが求められる。いもは野菜であり、外観が重視されるのは、当然なのである。

サツマイモの連作・単作化が一般的になる50年代以降、ますますサツマイモの野菜としての商品性が求められるにつれ、虫害(コガネムシの食害、線虫害)や病害(退色・粗皮症状、立枯病)、生理障害(皮脈、丸いも、裂開)がクローズアップされるようになった。(表2)立枯病は、55年、57年に多発したが、クロピク使用の機械一貫体系の普及とベニアズマの登場で鎮静化している。

品質低下の主要因として、退色・粗皮症状による皮色の悪化があるが、この主原因は、アブラムシによって媒介されるウイルス病であると言われている。この対策として、ウイルスフリー苗の利用が実用化されつつあり、千葉県でも、今年度より、現地網室での増殖試験が本格化した。

虫に食われていない、紡錘形をした、皮色

のあざやかな、かつ味の良い……見ばえの良いイモが求められるのである。いもは野菜である。

5 いもはいもか？

＝品種をアピールする＝

ベニコマチは、つる割れ病に弱い、形状が乱れやすく、長イモになりやすい、下位等級が多く出る等、作りにくい反面、価格が特別高くなく、生産者に敬遠

されつつある。しかし、年明け後の焼きいものおいしさは、他の品種には無い、格別の味を持っている。形は多少悪くても、味をもっと本格的にアピールするべきではないだろうか。

昭和30年代前半に、香取の一地域でも産地化されていたクリマサリは、やはり形状が乱れやすい等の理由で消滅した。現在、まぼろしのイモとして神奈川県平塚市周辺で作られていると聞くと、金時、ベニコマチもその運命をたどるかも知れないのである。

－金時のいろいろ－

高系14号の芽変異と言われている皮色の一段良い紅高系(商品名、千葉紅)は、色、つやの低下とともに、ベニアズマに地位を奪われ、現在は、ベニアズマが出荷される前の早掘りと年明け4月以降の最も遅出しの貯蔵物としての地位しか無い。

しかし、「鳴門金時」「坂出金時」「土佐紅」等、九州、関西方面で席卷している品種はすべて紅高系と同じ系統である。土質・栽培方法の違い、消費動向の違いと言えばそれまでだが、関東の金時は「紅赤」であり明らかに紛らわしい。広辞苑によると、金時とは「赤いものの意」をあらわす、とある。他の野菜にも金時と呼ばれている品種(系統)がある

(表2) 品種の変遷と病害虫

年次	昭和32	38	45	47	48	50	52	54	55	57	58	59	61
品 種	高系十四号 奨励品種	金時導入	デンブン原料栽培 急激に衰退	ベニコマナ 試験導入	ベニコマナ 奨励品種			紅高系導入			ベニアズマ 試験導入	ベニアズマ 奨励品種	
栽培の特徴と病害虫			マルチ早堀栽培導入	マルチ栽培普及	アカヒロードコガネ被害 生つる割れ病多発	アカヒロードコガネ被害 全域に広がる	立枯病発生		立枯病多発 アブイの被害多くなる	立枯病多発 ドウガネアブイ	紅高系に退色・粗皮症状 多発	ドウガネアブイの被害 多発	



中の一部が全く違う品種であった。また、露店で売られていたサツマイモのうち皮色が赤いものはすべて金時であった。買物客言わく「あら、赤くておいしそうね」。明らかに品種はいろいろの物が混っていたが、イモはイモなのである。イチゴ、メロン等、品種が外観で判定しやすい。果実類に含まれる野菜と違い、イモは外観で判定しにくい。我々のように商売柄、いろいろな品種を扱っている者でも、良く間違える。

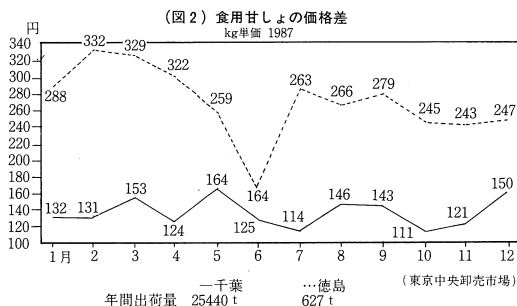
サツマイモは、品種で売られている場が少ないのが現状である。従って、その品種独得の良さをアピールする機会が少ない。一例をあげれば、金時はさまざまな用途に向くが、細いイモはスジが多い。ベニアズマは硬いので焼きイモ向きでは無いが、時間をかければ問題無く、蒸したてのあざやかな黄色（肉色）は、非常に食欲をそそる。しかし、年明けイモは、粘質化しやすい、等々。

一般的にはホクホクイモが好まれるが、粘質化したイモも根強い人気がある。粘質化はデンブンが糖化した状態であり、あまきそのものは高いためかも知れない。太白（花魁）なども、時々引き合いがあり、農林1号も焼きイモとして根強い人気があり、契約栽培で作られている。

が、金時は、きんときあずきのとおり、赤色のあざやかさを連想させる。

販売単価では日本一であろう「鳴門金時」と千葉県産かんしょの価格を比較してみた（図2）。鳴門金時の産地の土質、栽培法、洗い方、選別、販売戦略、どれをとっても日本一と言える要因がある。また、東京卸売市場での単価比較で、出荷量が大幅に異なり、鳴門金時は、上位等級物しか関東には出荷されて来ない、ということもあるかもしれない。いずれにせよ、関東の紅赤が関西の高系と同等にしか見られていないのである。

数年前、かんしょの神様として崇敬された青木昆陽の墓所のある東京目黒不動（天台宗竜泉寺）で行われる甘しょ祭りを見学に行った。品種ごとにイモが飾られていたが、その



サツマイモは、繊維質の高い健康食品として、時々、マスコミに取り上げられるが、飽食時代の一現象のような感がする。品種ごとの加工特性、用途等、特徴を把握した上での生産、販売ができていないと言いがたい。作る側の情報不足、作る側・使う側・食べる側とのコ

ミュニケーションができていないと痛切に感じるのは筆者だけであろうか。

かんしょは、あまりにも用途が広すぎるが品種の違いによる長所、欠点をふまえた上で消費者にアピールする働きがけが、今後特に必要であろう。

イモ類・豆知識

三六三万八千屯 63年産春植え 馬鈴薯収穫量

農水省発表、63年産春植え馬鈴薯の都府県収穫量及び北海道予想収穫量(63年8月15日現在)は次の通り

★都府県

作付面積 四六七〇〇ha

(前年比 九九%)

10a当り収量一八三〇kg (九七%)

収穫量八五万六八〇〇屯 (九六%)

作況指数 九六

★北海道(予想収穫量)

作付面積 七二七〇〇ha

(前年比 九七%)

10a当り収量三八三〇kg (九六%)

予想収穫量 二七八万一千屯 (九三%)

作況指数 一〇三

★合計

作付面積 一一九四〇〇ha

(前年比 九八%)

10a当り収量三〇五〇kg (九六%)

予想収穫量 三六三万八千屯 (九四%)

作況指数 一〇一

★北海道の概況

予想収穫量は前年比二〇万五千屯(七%)の減少が見込まれる

これは作付面積が二二〇〇ha(三%)減少し10a当り収量も豊作であった前年を一六〇kg(四%)下回ると見込まれるため。

▲いもの肥大は、6月下旬以降多照・寡雨に推移している事から、一部の地域を除いて茎葉の枯上りが早まり、やや緩慢に推移しているが、作柄は作況指数一〇三の「やや良」が見込まれる。

北海道産馬鈴薯

原料いもの生産を押さえ平成元年度概算要求でも今後の自由化に備えた諸施策を講じて行かねばとされているものの、その線に添った展開をして行っても販売価格の点で、コンスターチに較べてどうしても割高となってしまう。そのコンスは原料高と旺盛な需要を映して再値上げと鼻息は荒らしい。

それに対して国産各品は大量在庫が一向に捌けない、抱合せ売却分以外はコンス等を利用してカバーして行く傾向が強い。この様に完全な迄に浮き上ってしまったて居り、これを是正するには価格を大幅に引下げねばならないが、今迄のいきさつから

それもままならない。

つれて市中人気は殆んど名目化した儘の状態で動意を削がれている。

△東京の人氣(一kg)

現品一五五〜一五七円

直積

カンショのフリー 苗生産へ

茨城・なめがた 農協で取り組む

【茨城】カンショのウィルス病を撲滅しよう——と、行方郡のなめがた農協は、独自に昨年からウィルスフリー苗の生産に取り組み、早ければ再来年にも農家へ配布できそう。

同農協はカンショ紅高系などに致命的な被害を与えている「粗皮症」の被害から守るために始めたものの、粗皮病はウィルス病とされ、表皮がまだら状に白くなり、商品価値が全くなくなる。粗皮症を防ぐには、フリー苗におきかえるしかない。

同農協は六十二年春から準備をはじめ、生長点培養に必要な人工気象室も導入した。今春からは網室ハウスで増殖をはじめた。農家への配布方法は、具体的に決定していないが、うまくいけば再来年ごろから配布できそうという。